柳沼重剛略歴・業績

略　歴

大正15年12月１日	東京都に生まれる
昭和20年４月	京都大学文学部（宗教学宗教史専攻）入学〔同24年９月卒業〕
24年12月	東京都立九段高等学校専任講師（英語）
25年４月	東京大学大学院文学研究科（言語学専攻）入学〔同30年３月退学〕
25年５月	東京都立九段高等学校教諭〔同31年７月退職〕
31年７月	京都大学助手（文学部西洋古典研究室勤務）〔同36年９月退職〕
34年９月	The British Council 留学生として英国St. Andrews大学大学院（Department of Greek）に留学（至35年７月）
37年４月	立命館大学助教授（経営学部 英語）
41年４月	立命館大学教授〔同42年３月退職〕
42年４月	東海大学教授（文学部第一外国語学科＜英語＞）
47年７月	東海大学（文学部人文学科＜一般教育＞）主任教授〔同51年３月退職〕
51年４月	筑波大学教授（文芸・言語学系所属／比較文化学類担当）
61年４月	筑波大学文芸・言語学系長〔至62年５月〕 筑波大学評議員　〔至平成元年６月〕
62年６月	筑波大学附属図書館長　〔至平成元年６月〕

著　書

昭和49年	『古代知識人群像』	東海大学出版会

翻　訳

昭和35年　エウリピデス『イオン』（『ギリシャ悲劇全集』第三巻収録）
人文書院
40年　エウリピデス『ヘラクレスの子供たち』『レソス』
（『ギリシャ悲劇全集』第二巻収録）　筑摩書房
44年　G.ハイエット『西洋文学における古典の伝統』上・下
筑摩書房
57年　A.モミリアーノ『伝記文学の誕生』　東海大学出版会
（佐伯彰一氏との対談「伝記文学の視座」を含む）
60年　プルタルコス『饒舌について　他五篇』　岩波文庫
61年　プルタルコス『愛をめぐる対話　他三篇』　岩波文庫
62年　プルタルコス『食卓歓談集』　岩波文庫
63年　プルタルコス『似て非なる友について 他三篇』岩波文庫
平成２年　プルタルコス『イシスとオシリス』〔刊行予定〕　岩波文庫
ソポクレス『アンティゴネー』　岩波書店
（『ギリシャ悲劇全集』収録）〔刊行予定〕

論　文

昭和28年　「古代ギリシャにおける神と人間」
（『西洋古典学研究』Ⅰ，46－52頁）
36年　「Truth about Knossosの問題」
（『西洋古典学研究』Ⅸ，72－78頁）
37年　「テセウス／ヘレネ伝説の一考察」
（『西洋古典学研究』Ⅹ，49－61頁）
38年　「Popeの *Iliad* について」＜１＞
（『外国文学研究』＜立命館大学紀要＞６号，75－93頁）
「Popeの *Iliad* について」＜２＞
（『外国文学研究』＜立命館大学紀要＞７号，34－50頁）
41年　「英雄の変容」
（『外国文学研究』＜立命館大学紀要＞13号，１－24頁）

42年　「死すべきもの」　（『立命館経営学』22号，35－52頁）
'Greek Poetry in the Italian Renaissance'（*Annuario*＜ローマ日本文化館年報＞Ⅳ，126－135頁）

45年　「英雄的ということ－アキレウスの場合」
（『外国文学研究』10号，154－178頁）

46年　「悲劇の Trimeter について」
（『西洋古典学研究』XIX，31－42頁）
「エウリピデスの悲劇における Trimeter Verses」（『東海大学文学部紀要』15，315－328頁）

47年　「大学における古典教育のあり方」（『西洋古典学研究』XX，100－102頁）
「学者としてのハウスマン」（『文明』＜東海大学文明研究所紀要＞6，3－19頁）

48年　「文学の学者」（斎藤博編『文明理論への試み』187－222頁）東海大学出版会
「ギリシャ悲劇の起源は祭祀か」（『現代思想』8月号，222－230頁）

49年　'Eteocles in the *Seven Against Thebes*'（『東海大学文学部紀要』22，1－8頁）

52年　「シシリー島のニキアス」（『文藝言語研究』＜筑波大学文芸・言語学系紀要＞1，33－50頁）
「古典古代における文学の概念」（小西甚一編『文学概念の変遷』15－42頁）国書刊行会

53年　「文学と文学でない文―主として歴史について」（筑波大学理論文学研究会編『文学の根拠』3－32頁）冬樹社
「プルタルコスの『コリオラヌス伝』」（『文藝言語研究』2，1－20頁）

54年　「大学における英語教育のあり方」（玉井東助編『英語教育と検定制度』＜筑波大学外国語検定制度研究会＞，25－46頁）
「プルタルコスの伝記における性格」（中村善也・松本仁助・岡道男編『ギリシャ・ローマの神と人間』＜松平千秋先生退官記念論集＞，67－95頁，東海大学出版会）

55年 「悲劇詩人における -sis名詞の用法」
（『文藝言語研究』 4, 91−114頁）
56年 「-sis 名詞再論」 （『文藝言語研究』 5, 1−22頁）
57年 「トゥキュディデスの演説の文体について」
（『文藝言語研究』 6, 1−28頁）
58年 「ツキジデスにおける分詞構文の用件」
（『文藝言語研究』 7, 1−26頁）
59年 「ツキジデスにおける主観を表す語」
（『文藝言語研究』 8, 1−24頁）
60年 「Historia＝＜歴史＞概念の成立」
（『文藝言語研究』 9, 29−50頁）
61年 「ディオニュシオスのトゥキュディデス文体批評」
（『文藝言語研究』 10, 1−22頁）
「西洋古典学と日本人」（林四郎編『応用言語学講座』第5巻, 137−150頁）明治書院
62年 「トゥキュディデスにおける Parataxis と Hypotaxis」
（『文藝言語研究』 11, 1−24頁）
63年 「トゥキュディデスとクセノポンの 'Connective' *Γάρ* と *Δέ*」
（『文藝言語研究』 15, 1−20頁）
平成1年 「トゥキュディデスの長文について」
（『文藝言語研究』 15, 1−28頁）
2年 「ヘロドトスとトゥキュディデスの戦闘描写」
（『文藝言語研究』 掲載予定）
'*Thucydides* 5, 100.' in *Owl to Athens: Essays dedicated to Sir Kenneth Dover*, Oxford, Oxford University Press., 1990. (to be published)

《付　記》

「略歴」に書かれていない履歴は次のとおり：

昭和８年４月　東京市小石川区立竹早尋常小学校入学
14年４月　第一東京市立中学校入学
18年３月　同　第４学年修了
４月　浦和高等学校入学（文科：第一外国語をドイツ語とする組）
20年３月　同　卒業（戦時中修業年限短縮）

昭和20年５月　京都大学入学直後に応召，広島県八木松在の駐屯地，原子爆弾投下をはるかに目撃，同日夕刻救援作業のため広島市内に赴き，約10日間駐留。ために二次被曝。

昭和20年10月から昭和21年３月まで，京都大学休学（のつもりだったが，実際には休学願の郵便が大学に届いておらず，ただの欠席扱いになった）。

この期間中米軍の朝霞 Camp Drake において House Boy としてアルバイト。Inspector General という職務にある陸軍中佐 R.R.Boyer 氏の Boy となる。この人は父はドイツ人，母はイギリス人，夫人はギリシア人で，８国語を能くした。この人と，京都大学助手在任中に知り合った Cambridge 出身の Roger G.Matthews 氏からは，単に語学上のことばかりでなく非常に多くの恩恵を受けた。

恩師と仰ぐのは，京都大学の田中美知太郎先生（故人），松平千秋先生，武内義範先生，東京大学の高津春繁先生（故人），St.Andrews 大学の Sir Kenneth J.Dover 先生，Ian G.Kidd 先生。これまでの人生のいろいろな段階でお世話になった方々は大勢いらっしゃって数え切れない。

幼時の記憶としてドイツの飛行船ツェッペリン号の来訪，浜口雄幸の狙撃，満州事変の勃発があり，二・二六事件，日中戦争の勃発は小学生の時

分の出来事であり，太平洋戦争の開始は中学3年のこと，敗戦は大学1年のことになる。

余暇の過ごしかたとしては，探偵小説（ミステリーということばを好まない。ミステリーの概念があまり広くて，探偵以外のものまで含んでいるから。ごひいきは，昔ならConan Doyle，Wilman Crofts，Dorothy Sayers，今の人ではMichael Innes，P.D.Jamesなど。少数の例外を除いてアメリカのものは好きではない）を読むか英国製クロスワード・パズルに熱中するか，クラシック音楽を聴く（ただしワーグナーは聴かない）か，落語を聴く（ただし桂文楽，三遊亭円生，古今亭志ん生の死後，落語は消滅したと信じている）か，庭掃除をするか，散歩（とくに休日の都心を歩くのを好む）に出るか，その他何かしている。

（柳沼記）